

## 「振り返り活動」の指導に関する考察 (2)

— 文化祭後の高校教員への調査を通して —

A study on the guidance of “Reflection activity” (2)

— Through an interview survey to high school teachers after School festival —

玉木 博章

Hiroaki Tamaki

### 1. はじめに

#### 1. 前稿との連なり

前稿<sup>1)</sup>である考察(1)では、振り返り活動の指導が現代において何故なされるべきなのかという問いについて、A. ギデンズ、U. ベック、Z. パウマンらの現代社会分析とその不安への対応策を比較検討した。なかでも最も悲観的な見地から教育によって希望を見出そうとしているパウマンの知見をベースに、S. ラッシュとJ. デューイの概念を援用して議論をした。そして結論として、振り返り活動とは生徒に個人的かつ集団的に省察の機会を与える教育的な営み<sup>2)</sup>であり、流動的な現代において個人化して反射的になっている生徒達には、自らの行為の意味づけを十分に行う機会が必要であると述べた<sup>3)</sup>。

特にパウマンは、生きづらい現代社会への対抗策として、教育によるエンパワーメント<sup>4)</sup>、異質なものに触れること<sup>5)</sup>、そして私的領域でも公的領域でもない「公共善」「公正な社会」「共有価値」といった諸観念が生み出され、形成されていくような領域であるアゴラの創造の重要性を説いていた<sup>6)</sup>が、そのことから逆説的に現代では私的領域でも公的領域でもそのような諸観念が導き出される場が消失していることを前稿では指摘した<sup>7)</sup>。そしてラッシュが「ノンリアな(反射的な状態にある第二近代の)個人は省察的でありたいと願っているのかもしれない。しかしながら省察する時間も空間もないのである。」<sup>8)</sup>と現代人の苦境を憂慮していることを挙げ、学校において教師の仲介によって意図的に自らを振り返り、気づきや学びを友人と共有して日常や自己を捉え直すことが、現代に蔓延

る不安感の緩和や、自らの存在確認にも繋がるという、振り返りの重要性を導き出した<sup>9)</sup>。

またこうした議論に関連して、岡村昭弘は、学校の役割として社会で生き抜くための能力を身につける場としての「通路」と、学校を含めたこの社会を問い直す政治空間としての「広場」としての二面性を把握<sup>10)</sup>していた。そしては学校を人材育成とキャリア形成のための通路だけでなく、政治主体を育てる広場として立て直すことが重要だということを提起している<sup>11)</sup>。

照本祥敬はこうした岡村の議論に賛同しながら、広場としての学校の側から通路を問い直す、あるいは通路の中に広場を埋め込むものである<sup>12)</sup>と解釈している。つまり将来に向かって個人化している生徒達の人生の中に、他者との出会いの場を設けることで、現状を変革していこうという試みだと看取できよう。したがって、こうした照本らの知見は、振り返り活動の実践レベルでの考案を示唆しており、個人化した通路に振り返りの広場を設けることによって、独りでは気づけなかったことに着目できたり、新たな発見をしたりすることの教育的効果について謳っているとも表現できよう。更に、そのような多角的な視野で自らを相対化することは、自己成長や省察的な意味づけの契機になるだけではなく、自らの思いを共有し合った友人達との関係形成そして連帯へと繋がる。例えば宮田延美は、小学生を対象とした運動会に関する研究の中で、計画そして実行の後に自己評価という項目を設けている<sup>13)</sup>。宮田が自己評価として設けている項目は、振り返り活動に類似した項目であると捉えられ、振り返り活動が実施されていることが看取できよう。

前稿ではこうした理論構築や実践との往還に加え

て、実際に学習指導要領解説において特別活動の学習過程としてPDCAサイクルに則った学習のモデルが示されている<sup>14)</sup>ことを確認した。また「特別活動における『深い学び』の実現には、特別活動が重視している『実践』を、単に行動の場面と狭く捉えるのではなく、課題の設定から振り返りまでの一連の活動を『実践』と捉えることが大切である。」<sup>15)</sup>とも示されていること、つまり具体的に振り返りプロセスが強調されている度合いを確認した。

## 2. 先行研究における特別活動の振り返り活動

しかしながら指導要領の内容を受け、振り返り活動の指導が当然であるという認識が影響してか、実際のところ振り返り活動そのものを中心に据えた研究は現在のところ少ない。もちろんそれは決して振り返り活動が軽視されていることを含意せず、実践を前提として成立しているため、多くの識者の著述は解説書等で指導要領を復唱し、その重要性を説くことに収斂していることは既に前稿でも述べている<sup>16)</sup>。ただ前稿からやや時間が経っているので、再度先行研究を俯瞰してみる必要がある。

例えばCiNiiの論文検索において「振り返り」と入力する<sup>17)</sup>と、約7200件弱の著作が浮上する。そこに「教育」というキーワードをプラスすると約3000件にまで減少する。それらを俯瞰してみると、教師が自らの指導を振り返る旨のもの、大学生に自らの生活や学習内容及び受けてきた教育等を振り返らせる旨のもの、道徳や総合を含めた教科教育において習熟を高めるために振り返る旨のもの等々が存在する。その内容は多岐に亘っているが、こうした著作のうち約2800件は2000年代のものであり、教育分野における振り返りへの着目度が近年上昇していると言える。

では、その中でも特別活動の領域では振り返りについてどのような議論がなされてきたのだろうか。既述のように膨大な先行研究が存在するものの、特別活動のみに制限すれば、前稿でも述べたように振り返り活動に関する先行研究はそれほど多くはない。実際に上森さくらも、近年、雑誌『道徳と特別活動』や『指導と評価』等を中心に、特別活動の評価実践の蓄積が進められているが、他の教科や領域の評価に関する研究に比べると、特別活動における評価に関する研究論文の数は少ないと言わざるを得ない<sup>18)</sup>と指摘する。上森の著述は、振り返りに関連した「評価」に関する指摘ではあるものの、上森が挙げた『道徳と特別活動』においては前稿でも列挙した著作も数点含まれている

が、それらも併せて整理を試みたい。

実際に2000年代では重松(2002)<sup>19)</sup>、森田(2003)<sup>20)</sup>、綿井(2004)<sup>21)</sup>、齋藤(2005)<sup>22)</sup>と少ないながら関連著作が存在する。翻って2010年代では首藤・木内(2013)<sup>23)</sup>、杉田(2015a, 2015b)<sup>24)</sup>、上原(2016)<sup>25)</sup>、内田(2016)<sup>26)</sup>、鎌田(2016)<sup>27)</sup>、黒木(2016)<sup>28)</sup>、齋藤(2016)<sup>29)</sup>、渡邊(2016)<sup>30)</sup>、三森(2017)<sup>31)</sup>、下鶴・木内(2017)<sup>32)</sup>、狩野(2018)<sup>33)</sup>、稲垣(2019)<sup>34)</sup>、八田(2019)<sup>35)</sup>、星野(2019)<sup>36)</sup>、山本(2019)<sup>37)</sup>と、毎年振り返り活動に関する実践例等や著述が小学校を対象にしたものを中心に存在し、2016年には「特別活動の『振り返り』を振り返ろう」との特集も組まれており、やはり近年の振り返り活動への着目度の高まりがわかる。

他にも前述の雑誌以外では前稿でも列挙した詫磨(2008)<sup>38)</sup>、桑原(2008)<sup>39)</sup>、藤田(2008)<sup>40)</sup>、西條(2013)<sup>41)</sup>、小林(2014)<sup>42)</sup>、阿部・神田・新城(2015)<sup>43)</sup>、市河・今田(2015)<sup>44)</sup>、川本(2016)<sup>45)</sup>、玉木(2017)<sup>46)</sup>、八川・岡田(2017)<sup>47)</sup>、上森(2018)<sup>48)</sup>、藤崎(2019)<sup>49)</sup>、木下・赤坂(2020)<sup>50)</sup>、平井・西山(2020)<sup>51)</sup>、本宮(2020)<sup>52)</sup>といった実践や研究が存在している。しかし、こうした先行研究の多くは振り返りの現状や課題といった振り返りそのものへの問いや研究的価値について論じているのではなく、実践全体の中で振り返りのプロセスに何らかの工夫を施し、経験の効果を高めたり、効果を測定したりする用途で振り返り活動に言及したものに過ぎない。したがって、前稿で論じたように振り返り活動のみに焦点化したものよりも実践プロセスの中で付随的に触れられているものがほとんどであり、特に質に関しては前稿発表時から未だ十分ではないことは確認できる。その背景には「振り返り」という活動における測定の質的困難さ、つまり数値化や可視化の困難さから派生する、何をもって「効果があった」かを認定するための議論も影響しているとも推察できよう。

## 3. 問題の所在と課題の設定

ところでこのように整理した先行研究を俯瞰してみると、小中学生を対象とした著述に偏重しており、僅かに桑原や藤田による実践<sup>53)</sup>は存在するものの、高校生はあまり著述の対象にはなっていない<sup>54)</sup>こともわかる。しかし、現在の高い高校等への進学状況<sup>55)</sup>を加味すれば、小中学生同様に高校生をも著述の対象になるべきであるとも指摘できる。

更に日本特別活動学会によれば、小中高の学校別で教員に行われた、児童生徒の行事参加状況を示した調査において「児童生徒は行事に意欲を持って参加して

いますか？」という質問に対して、「①かなりそう思う」と「②ややそう思う」と答えた肯定層の割合が小学生 98.3% (① 67.8%と② 30.5%), 中学生 100% (① 80%と② 20%), 高校生 92.9% (① 50%と② 42.9%) であり、高校生において最も肯定層が少ないことが明示されている<sup>56)</sup>。確かにいずれも高い数値を見せているものの、なお高校における行事を含めた特別活動の現状をより良い方向へ導いてくためにも、高校生を対象とした研究は小中学校を対象にしたものよりも急がれると言えよう。例えば、高等学校学習指導要領のなかで特別活動のうち学校行事についての箇所では以下のような資質・能力を育成するよう記されている。

各学校行事の意義や行事における活動のために必要なことを理解するとともに、規律ある行動の仕方や習慣を身に付けるようにする。

学校行事を通して集団や自己の生活上の課題を結び付け、人間としての在り方生き方について考えを深め、場面に応じた適切な判断をしたり、人間関係や集団をよりよく形成したりすることができるようにする。

学校行事を通して身に付けたことを生かして、集団や社会の形成者としての自覚を深め、多様な他者を尊重しながら協働し、公共の精神を養い、よりよい生活をつくろうとする態度を養う。<sup>57)</sup>

このことを実現するためにも、行事において自らの行動を振り返る指導をすることは、行事の体験をより効果的に生徒達の発達に繋げる方法の1つになり得ると主張できよう。

しかし詫磨秀雄は、指導要領に反して高校では進学実績向上のために行事を削減する傾向にある「行事の精選」について、取捨選択されるなかで何とか残った行事は、まだ準備や実施に対して理解が示される風潮は残っているが、その後のLHRについては、ほぼ消滅しており、そこには時間が無いというだけでなく、総括、反省、まとめを生徒に取り組みさせることへの価値観の切り捨ても見て取れる<sup>58)</sup>と憂慮している。詫磨の著述は、それを想定するための有効な先行研究として評価できるものの、学校ごとに個別具体的に俯瞰した場合の状況は明らかにはなっていない。加えてこの知見はあくまで実践家として活躍する詫磨の認識であり、複数人の一般教員の様相ではない。そしてこれまでのところ振り返り活動に関する教員の考えを反映した研究は管見の限り存在しておらず、高校での現状

や問題点、教員の振り返り活動への認識を具体的に探る必然性が明示される。

#### 4. 本稿の趣旨と構成

他方でこのように考えた時、振り返り活動が必要な経験とは、本稿が対象とする行事にのみ限定されるべきではないとも批判できよう。もちろん学習面や他の特別活動等での振り返り活動も十分著述の対象になるべきではある<sup>59)</sup>が、先行研究において詫磨が学校行事を対象にしていたこと、そしてより生徒が自らを振り返るような主体的かつ自治的経験の方が有効であること念頭に置き、本稿ではまずは行事、特に文化祭後の振り返り活動を著述の対象とする。実際に藤井啓之は、文化活動には日常を異化する力があることに触れ、文化的行事には非日常の側から日常を眺め直し、日常への違和感を生み出すことで日常を作り替えていく力がある<sup>60)</sup>と述べている。つまり、一度立ち止まって自らを振り返るためには、振り返りが必要となるような印象的な出来事が必須であり、多くても年1回しか催されない文化祭は、非日常という点でこの条件に適していると言えよう。

他方で、クラス運営をする担任にとっても文化祭は前々から準備が必要な大行事である。そのため、そうした時間を要する活動を経験しても振り返り活動を行わない担任が、他の行事で振り返りを行うとは想定しづらい。また、1年のうちで中頃に行われやすい文化祭は、その後のクラス運営にも大きく影響するため、どう事後指導するかが担任に重要となる。

よってこれら双方の理由から、本稿では文化祭を調査対象と定め、聞き取り調査を基に高校教員の声を反映し、振り返り活動の実施の現状や背景を明らかにしていくこととする。なお本稿は4節で構成される。第1節では前稿との連りを確認し、本稿における課題を明確にした。第2節では調査の概要と、その数字上の結果を示す。続く第3節では、数字上の結果から得られた特徴を基にして具体的に教員のインタビュー調査を分析する。そして第4節では本稿のまとめと今後の課題を示す。

## II. 調査内容と数量分析

### 1. 調査の概要

以上の問題設定を経て、高校の文化祭後の振り返り活動の現状を調査すべく愛知県、岐阜県の高校で担任をする教員に聞き取りした。詳細等は以下の通りである。なお学力階層<sup>61)</sup>に関しては、上位層から2校、

中位層から3校、下位層から3校となるべく偏りの無いように抽出できた。

これらの条件と内容で本調査は実施され、一定の結果を得た。以降では、この結果を基にして「振り返り」の実状について検討していくこととする。

実施時期	2012年9月～12月, 2013年9月～11月
実施人数	52名
対象選定	書面や(筆者の知人を通して)電話で依頼。
実施対象	年齢性別関係なく、学校訪問時に応じてくれた担任を持つ教員(ラポールが形成されている友人も含む)。
実施高校	愛知県・岐阜県の私立5校、公立3校計8校(女子校2, 共学校6)。
倫理的配慮	対面で趣旨を説明して録音に同意してもらい、論文化の許可も得ている。また、本人特定ができないよう個人情報には掲載していない。
記録方法	ICレコーダーを使用。
質問項目	以下の5項目を基に、振り返り活動の指導に関する実状や教員個人の考えを明らかにすべく半構造化インタビューの形式を取った。

- 1, 文化祭終了後に文化祭を振り返る時間や総括の時間、もしくは生徒を労うため授業後等に特別な時間を取ったか?
- 2, 「時間を取った」と答えた場合、それはどのくらいの時間を取ったか?
- 3, 理想としてどのくらい時間を取りたいか?
- 4, 「時間を取っていない」と答えた場合、振り返りの時間を確保した方がいいと思うか? それとも根本的に必要ないと思うか?
- 5, 「本当は必要あると思う」と答えた場合、どの程度時間を取りたいか?

## 2. 調査の結果

以上の設定を経た今回の調査結果は、振り返り活動の時間を取った者が31名、取っていない者が21名であった。表1は結果や詳細をまとめたものである。もちろん本調査は無作為抽出ではないため、結果が絶対的なものであるとは断言できないが、一見すると、この結果は振り返り活動への教員の態度を示したものであるとは推定できる。他方でこの数字の裏には、聞き取り調査ゆえに得られた教員の本心も存在しているため、単純にこの結果が教員認識の全体像を示すものとは受け取ることはできない。実際に学校によって協力してくれた教員の数も異なるため、数字以上に教員の認識を基にして、振り返り活動の現状を考察する必要がある。よって、まずは下記の学校別調査結果を基に考察したい。

俯瞰してみると、今回の結果は学校ごとにかかなりのばらつきがあることがわかる。指導要領を踏まえれば、実施していない教員が半数近く存在することも驚きではあるが、実施が0という①の学校が目を引く。またそれに対して、②と④の学校では逆に未実施が0となっている。これら下線かつ斜体で記した3校には何か結果に関わる要因があるのだろうか。

そこでここからは、この3校の違いに焦点化して議論を展開していくこととしたい。したがって、前述した5つの質問項目のうち特に2～5に表出する理想の時間等に関わる問いに関しては別の機会に検討を譲り、本稿ではそうした問いの前提となる問題や要因に着目して、有効な内容が得られた教員<sup>62)</sup>のインタビュー調査の内容を分析しながら考察していく。

表1. 学校別調査結果詳細及び属性

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	計と属性比	数字は学校
学	上	上	中	中	中	下	下	下	2:3:3	学は学力階層
性	共	女	共	共	女	共	共	共	2:6	性は学校での男女構成
立	公	私	公	私	私	公	私	私	3:5	立は公立私立の区分
実	0	13	1	8	4	1	2	2	31名	実は実施した教員数
未	6	0	2	0	3	4	2	4	21名	未は実施しなかった教員数
計	6	13	3	8	7	5	4	6	52名	計は合計の教員数を示す

### Ⅲ. 質的調査から得られる振り返り指導に関する規定要因とその分析

#### 1. 30代男性 A 教諭への調査を中心とした①の学校実情

まずは①の学校の内情を、重要箇所のみ断片的にはあるが A 教諭（以降 A と示す）への調査を中心にして示していく。なお A 及び他の教員への調査は 2013 年 9 月 26 日木曜日に実施している。A とは場所を移して 20 時から 30 分程度時間をとった。筆は筆者を示す。

筆 「A 先生は今年の文化祭後、文化祭を振り返る時間とかが取られました？」

A 「取ってないですね。」

筆 「それはどうしてですか？必要無いと思ってるからですか？」

A 「いや、必要とか必要じゃないとかではなくて。そもそも取れないんですよ。学校の方針で。取るな、って言われてるんです。」

筆 「え、そうなんですか！？どうして？」

A 「ウチは進学校なんですけど。まず学祭の文化祭の時期が9月とかじゃなくて6月なんです。受験に支障が無いようにするためなんですけど。その時期に体育祭とまとめて文化祭もやって、行事が終わった後は、例えば模擬店とかの表彰とかされても、絶対に教室には飾らないよう言われてるんです。まっ切り替えと言うか、思い出に浸らずに勉強に向かえと言うか。だから振り返りとか労いの時間は取れないんですよ。特に3年生の担任だと、文化祭終わった後に、校長とか主任とかから行事のことには触れるな、って注意を受けるんですよ。」

筆 「そんな学校なんですか①（高校名が入る）は。意外です。」

A 「はい。僕も、実際に来てみて驚きましたね。」

筆 「A 先生自身は、そういうの良くないと思ってるんですか？振り返りの時間取った方がいいと思ってます？」

A 「そうですねえ。僕だけじゃなくて、周りも含め、どうなんだろうね。っていう声は聞きますね。1時間くらい学活の時間欲しいですけど。でも、校長の方針というか。そういう学校の伝統というか、雰囲気なので。」

こうした A の聞き取り調査にあった「行事のこと

には触れないように」との言葉は「切り替え」という意味を含めてのことではあるが、詫磨が述べる、振り返り活動に取り組ませることへの価値観の切り捨てとも言える学校の考え方が伺える。

指導要領で実施が促されているにも拘らず、このような方針を取る背景には、現代の学力競争と、詫磨や A が述べる進学実績の向上という学校間競争を抱える学校の問題や、学校の決定方針に逆らえない、もしくは逆らわない教員の学校組織内での意向も推察されよう。より断片的にはあるが、他の教員の言葉を参考してみたい。

「やった方がいいとは思うんだけどね。まっ切り替えるためにやらない方針って言われるとね。それに従うしかないよね。」(40代男性教員)

「基本的に、上から言われたことには逆らえないですよ、年齢的に。なぜやってはいけないんだろう、とは思いますが。」(20代女性教員)

このように A を含め教員は学校の方針に違和感を抱きつつも結果的にその方針に従っており、そこに振り返り活動に対する教員の現状認識も観察できる。それは組織の一員であるという立場からでもあろうが、むしろ教員らは進学実績向上のためという名目で渋々ながら学校の方針に納得してしまっているように看取できる。つまり生徒のためには振り返り活動を行った方が望ましいが、進学指導のためには行わないという選択も仕方がないという認識をして、学校の方針を甘受していると言えよう。

このことから詫磨が述べるように、総括・反省・まとめを生徒に取り組ませることに価値を見出さない学校があり、そこには、そのような方針に疑問を持ちつつも渋々ながら納得してしまっている教師もいることが明確にはなった。

#### 2. 20代男性 B 教諭への調査を中心とした②の学校実情

次に②と④の学校のように、学校単位で全体が実施していたケースを検討したい。この2校は、文化祭終了後必ず1時間は総括として予め時間割に組み込まれていたため、このような結果が生まれている。まずは②の学校の内情を、重要な部分のみ断片的にはあるが B 教諭（以降 B と示す）への調査を中心にして示していく。なお B をはじめ他の教員への調査は 2012 年 10 月 17 日水曜日に実施している。B とは 18 時か

ら実施し、30分程度時間をとった。

筆 「B先生は今年の学祭後に、学祭を振り返る時間と違って取られましたか？」

B 「ウチは反省の時間というか、学活の時間が元々翌日に入ってるんですよ。」

筆 「そうなんですね！それは②（高校名が入る）らしいとか。納得です。でも、そもそもその学校の意図は何なんですか？」

B 「ウチは文化祭とかの生徒主体行事は対外的な学校のアピールポイントなんですよ。だから行事自体を盛大に行って、それを通じて生徒それぞれの成長に繋げるんです。もちろん入学志願者増加のためのPRってのもあるんですけど。」

筆 「確かに文化祭って中学生とか来ますもんね。ちなみに振り返り時間って何やってもいいんですか？B先生は具体的にどのようなことをしているのですか？」

B 「生徒会のアンケートは必ずやりますけど、あとは担任次第で。僕は時間を取って一人ひとり学園祭を通して感じたことを書いてもらってますね。」

筆 「それはどうするんですか？」

B 「僕が目を通します。」

筆 「その後は？それを公開したり、生徒にシェアさせたりはしないんですか？」

B 「そこまではやれないですね。赤裸々過ぎて、公開していいものとダメなものもありますし。僕だけが見るという前提で書いてもらっているんです。でも、これは取り上げたいなあという意見は、本人に確認してみんなの前で話したりはしますね。まあ稀ですけど。」

筆 「シェアさせないで、感想を書いてもらうだけで、効果あったりするんですか？」

B 「共有することだけが目的じゃないですから。変に公開して何か起こると大変です。僕が知りたいだけとか。年頃の子って素直じゃないんですよ。上辺だけはそれなりに取り繕って、学園祭自体は終わって。ウチの生徒は特になんですけど。でもこういう形で聞くと、意外と本音を書いてくれて。あー、あの時こんなこと思ってたんだ…っていう発見とか、生徒の新しい一面を知るいい機会になりますね。それで今後その子や関係してる生徒にアプローチしやすくなりますし。」

一見するとBの勤務する②の学校は振り返り活動を生徒の教育機会と捉えていると推察されるが、実際に学校は、振り返り活動を「生徒それぞれの成長に繋げること」に加えて、学校のための利益に利用するという意図もあった上で実施しているようにも看取できる。つまりこのような学校にとって振り返り活動は、振り返り活動をしているという事実造りや、そしてその時間を使って作られたアンケート等の何らかの資料を得るための時間としても機能しており、実施はしているものの、指導要領が謳うような目的を念頭に入れた実施なのかという疑義が生じる。ではこのような現状に関して、②の高校の他の教員はどう認識しているのだろうか。参考にしてみたい。

「バタバタするし。単純に、アンケートとかをやる時間としてこういう時間を学校がとってくれるだけでも予定上助かるしね。」(30代男性教員)

「学校の方針として振り返りの時間があると、生徒の表情を落ち着いて確認できるし、自分も反省になるんですよ。」(30代女性教員)

このようにやはり振り返り活動の実施は学校の方針が規定要因になっている。だが教員にとっては、実施する学校の背景はいかにせよ、結果的にBのように振り返り活動を、生徒そして自分のための有意義な機会として活用している。もちろん、教員個々では振り返り活動をどのように運用しているかは異なるが、学校方針での実施やBのような教員の存在は、詫磨の述べる傾向を再考する材料にはなりえる。

他方でBの「共有することだけが目的じゃない」という言葉には、振り返り活動に関するBの認識の高さが含意される。前稿ではデューイに依拠し、生徒の状況を見極め、振り返り活動を即時に集団で行うことは道徳的であるが、翻ってクラス状況によっては敢えて行わず、そのタイミングを見計らい、改めて行うこともまた道徳的であるという視点も正である<sup>63)</sup>と論じた。換言すれば、振り返り活動を行うことは生徒の成長を促そうとする教師の職務とを全うするという点で道徳的な行為ではあるものの、それを機械的に行うことは道徳的であると言えない。なぜならば教育とは工学的もしくは技術的な実践というよりむしろ道徳的な実践<sup>64)</sup>である。したがって、こうしたBの専門性のある認識もまた、詫磨の認識への批判材料になりえるだろう。

## 3. 20代男性C教諭への調査を中心とした④の学校実情

最後に、②と同様に文化祭終了後には必ず1時間は総括として予め時間割に組み込まれて実施していた④の学校を、C教諭(以降Cと示す)への調査を中心に考察したい。なおCと筆者は知人であるため、調査は2012年12月22日土曜日19時から30分程度時間をとった。

筆 「④(高校名が入る。以降同じ)は週明けの月曜日に文化祭を振り返る時間があるんですね。」

C 「そうだね。学校の方針で強制的にやることになってるんだよね。」

筆 「そうなんですか。ちなみに先生は何をやられたんですか?」

C 「アンケートはやることになってるから、それをやって。あとは適当にみんなに感想を書いてもらったりとかかな。ウチは何かにつけてアンケート好きだから。」

筆 「何のために学校はそういう方針を出してるんでしょうかね?」

C 「ウチはそういう生徒会活動というか、行事ごとには力を入れてるせいだろうね。総括しろ、ってことだと思うよ。こういう総括の時間を設けるか設けなかって、学校でかなり違いがあるんだろうけど。」

筆 「確かに④は高フェス<sup>65)</sup>とか、生徒会が行事に率先して活動しているイメージありますね。僕の友人も④で生徒会長していて。よくそういう話は聞きました。」

C 「いや、高フェスは関係無いかな。もちろん高フェスと行事がかなり関係してる学校もあるけど。例えば僕が以前いた学校はそうだったかな。でもウチはそういうのじゃなくて、単純に行事の総括ってことだと思うよ。そういったところもウチの学校の売りでもあるからね。まあ今はその頃に比べて随分形骸化してるだろうけど。本来なら、やってみてどうだったとか、来年のための改善点とか話合うべきなんだろうね。」

筆 「その、売りってどういう意味ですか?」

C 「ウチは目標が自治と〇〇<sup>66)</sup>だから」

筆 「なるほど。確かに自治ですね。ちなみに生徒に書いてもらった感想とかってどうするんですか?アンケートじゃなくて。」

C 「それは一応読むよ。」

Cの言葉からは、④の学校ではBの勤務する学校よりも、生徒のために振り返り活動が存在するように感じられる。学校が掲げる目標を達成するために、学校側が振り返り活動を重要なものと位置づけ、実施しているようだ。もちろん「売り」という言葉を使っていることから「行事活動に特色を出している学校」という対外的アピールを意識していないとも言い切れない上、現在は形骸化しつつあるという言葉は懸念材料ではある。だが少なくとも、そのような状態であっても学校は実施する方針を現在でも貫いていることは、振り返り活動を指導要領の通り重要視していると捉えられ、教師もその方針に従っていることがわかる。

したがってBやCの言葉を総じて踏まえれば、①の学校や詫磨の憂慮に反して、振り返り活動の実施に肯定的な方針を持つ学校や、専門性ある認識の教員の存在が明らかになったと言える。加えて詫磨が憂慮した未実施の場合だけではなく、実施にも学校の方針が影響している事実が明らかになった。

## IV. おわりに

## 1. 本稿のまとめ

本稿での結果から、①の学校の場合も②と④の学校の場合も、学校の様々な意図が振り返り活動の実施及び未実施を規定していることが明らかになった。その反面、この①、②、④の3校以外の学校では、特段学校からの指示はなく、実施及び未実施は教師の指導方針に任されていたため、表1に示したようにまばらな結果となった。そこで表1に示した52名の結果を、学校の指示の有無を踏まえて以下①～④の4型に分類し、表2を作成した。

指示が無かった③、④を①、②、④以外の5校が占めている。もちろん表2は、本稿の結果のみを反映したものであるため限定的なものではある。実際に調査全体の人数が①、②の3校に偏っている原因の1つは、インタビューをしていく中で、学校の指示にかかわる真偽を確かめたからであり、意図せず結果的に人数が増してしまった点にも配慮が必要となる。しかし本稿で大きく取り上げた①、②に該当する3校では、本心はどうあれ学校の方針に背いた教員はいなかったことが表2からは再確認できる。つまり振り返り活動の実施は、学校の方針が存在する場合には、それが絶対的な規定要因となってしまっていると言える。そして学校の方針が無い③、④の場合は、教師個人の判断に任されているようだ。

したがって振り返り活動の実施には、様々な背景か

表 2. 本調査結果における振り返り活動の実施及び未実施のまとめ

学校の指示と指導実施の有無	人数	表 1 での学校分類
①学校の指示で時間を取った	21	②, ④
②学校の指示で時間を取らなかった。	6	①
③学校の指示は無いが時間を取った。	10	③, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧
④学校の指示は無く時間は取らなかった。	15	

らなる学校の方針が優先的な規定要因となり、詫磨の憂慮が存続してしまっている学校があること、またその一方で逆の学校の存在も明らかになった。既述した詫磨の認識では、昨今の学校の傾向として振り返り活動が行われなくなっているとのことであったが、本稿で扱った②や④の学校の存在は、詫磨の述べる現状に対して一石を投じるものとなった。

他方で、本稿で扱った教員達の声からは、振り返り活動に肯定的な声、特に①の学校では方針に従ってしまっているものの「実施した方がいい」という前向きな疑問を抱える教員達が、実施しない傾向にある学校下において、詫磨以外にもまだまだ存在していることも明らかになった。

## 2. 今後の研究への展望と課題

本調査では、方針を出していたのが8校中3校のみという結果ではあったが、今後はこのような学校の方針が公立私立の違いや学力階層等、学校の属性と何らかの相関関係があるのかどうか検討する必要もある。つまり今回進学実績向上のために未実施の方針を出していたのは公立の上位校であったが、実際にそれは私立でもありうることなのか、そして学力階層が低い高校<sup>67)</sup>でもありうることなのかという問い。また今回方針を出していたのは経営問題が常に付いて回る私立高校ではあったが、公立高校でも生徒募集等の対外アピールのために振り返り活動を実施する方針が出されることがあるのかという高校の属性と方針に関する様々な問いが生じる。更に敷衍して述べるならば、こうした事実は、教師の学級経営実践に対して学校側が干渉もしくは管理を強めている一例とも見なせるだろう。いずれにせよ、今後はよりサンプル数を増やして研究を進める必要がある。

加えてB教諭やC教諭の聞き取り調査からは、指導を行っていけばそれで良いという単純認識では看過できない振り返り活動に対する学校の意図や、その活動の形骸化の問題も浮き彫りになった。だが指導要領

で実施が促されている点を鑑みれば、まずは指導がなされることが望ましい。その上で、今後は指導が行われている場合の方法論や効果や、何故形骸化しているのかに関する議論に目を向けるべきだろう。

他方で本稿では、まずは先行研究である詫磨の憂慮に応答する形で学校の方針を分析することに収斂してきたため、学校の方針が明確ではない表2の③、④のケースに関しては検討しなかった。教師個人の判断で指導の有無が決定される場合、そこには振り返り活動に対するいかなる教師の認識が存在するのかを明らかにすることも次なる課題である。また、そもそも本稿では学校要因という意図しない結果に直面したため、予め用意した質問内容であった理想の時間等に関わる各教員の思考に関しては検討しなかった。このような残された議論を含め、本稿での結果は今後の研究の一部に過ぎず、特別活動における振り返り活動に関する研究が急務であることは言うまでもないだろう。

## 注および引用文献

- 1) 玉木博章, 『『振り返り』活動の指導に関する考察(1) —特別活動実践における重要性と道徳性の観点から—』『中京大学教師教育論叢』, 7, 2017, p.49-64.
- 2) 玉木, 前掲書, p.56.
- 3) 玉木, 前掲書, p.60.
- 4) Z. バウマン著, 長谷川啓介訳『リキッドライフ—現代における生の諸相』, 大月書店, 2008, p.211-212.
- 5) バウマン, 前掲書, p.136, 211-212.
- 6) Z. バウマン著, 中道寿一訳, 『政治の発見』, 日本経済評論社, 2002, p. 5
- 7) 玉木, 前掲書, p.70.
- 8) Scott Lash, 「Individualization in Non-Linear Mode」, Ulrich Beck and Elisabeth Beck—Gernsheim, 『Individualization: Institutionalized Individualism and its Social and Political Consequences』, SAGE Publications Ltd, 2002, p.9.



- 9) 玉木, 前掲書, p.60。
- 10) 岡村昭弘, 「政治と教育の関係 (教育の論点 政治と公教育のあいだ)」『高校生活指導』, 194号, 全国高校生活指導連絡協議会, 青木書店, 2012, p.110
- 11) 岡村, 前掲書, p.112。
- 12) 照本祥敬, 「ホームルームと学びの場『通路としての学校』を問い直す『高校生活指導』, 198号, 全国高校生活指導連絡協議会, 青木書店, 2014, p.52。
- 13) 宮田延実「目的達成を目指す子どもの関係性を高める運動会—自己調整能力を高めるプログラムを通して—」『日本特別学会紀要』, 第20号, 2012, p.83-84。
- 14) 文部科学省, 『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』, 東京書籍, 2018, p. 48, 79, 95。なお前版の学習指導要領の内容とは文面上の大きな相違は無い。
- 15) 文部科学省, 前掲書, p.29。
- 16) 玉木, 前掲書, p.50-51。
- 17) 2021年1月15日現在での検索。
- 18) 上森さくら「特別活動でのルーブリックを活用した振り返り活動の批判的検討」『金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要』, 10, 2018, p.93。
- 19) 重松恵子「道徳実践例 思慮・節制 第6学年 生活を振り返り, 気持ちのよい生活をしようとする態度を育てる」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 19(6), 文溪堂, 2002, p.32-35。
- 20) 森田純子「特別活動実践例 学級活動 (1) 第6学年 自分らしさを発揮し, 互いに高め合う学級活動: 活動の振り返りを大切にしながら」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 19 (12), 文溪堂, 2003, p.32-35。
- 21) 綿井登貴子「特別活動実践例 学級活動 (1) 第6学年 雨の日の過ごし方を考えよう: 日常の指導から事後の振り返りまでを通した話し合い活動」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 21 (4), 文溪堂, 2004, p.42-45。
- 22) 齋藤亮一「特別活動実践例 特別編 振り返りを生かした活動: 入門期の学級会の実践」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 21 (10), 文溪堂, 2005, p.50-53。
- 23) 首藤涼一郎・木内悦雄「特別活動編 課題を振り返りながら進めて得た充足感」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 30 (1), 文溪堂, 2013, p.52-55。
- 24) 杉田洋「心を育て, つなぐ話し合い活動 (第5回) 学級活動 (2) の指導の工夫 (自己決定と振り返りの重視)」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 32 (5), 文溪堂, 2015a, p.38-41。杉田洋「個を育て, よりよい学級をつくる学級会(第12回)振り返りの工夫」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 31 (12), 文溪堂, 2015b, p.34-37。
- 25) 上原行義「別活動における「振り返り」の基礎基本—めあての設定と児童の自己評価の在り方—」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 32 (10), 文溪堂, 2016, p.4-7。
- 26) 内田恵子「学級活動 活動意欲を高める振り返り」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 32 (10), 文溪堂, 2016, p.16-19。
- 27) 鎌田哲至「児童会活動 Act (改善) につながる Check (振り返り)」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 32 (10), 文溪堂, 2016, p.20-23。
- 28) 黒木力「学校行事と道徳を関連させた指導: 学校行事の振り返りに「道徳」というアクセント」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 32 (10), 文溪堂, 2016, p.28-31。
- 29) 齋藤麻衣子「児童会活動 児童の主体的活動となるためのクラブ活動の『振り返り』の工夫」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 32 (10), 文溪堂, 2016, p.24-27。
- 30) 渡邊悠子「学級活動 実践への意欲につながる振り返り」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 32 (10), 文溪堂, 2016, p.12-15。
- 31) 三森美里「よりよい生活や人間関係を築く態度が育つ特別活動の指導の工夫: 自発的, 自治的な実践活動の積み重ねと振り返りの充実」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 33 (11), 文溪堂, 2017, p.27-29。
- 32) 下鶴唯・木内悦雄「実践! 赤ペンチェック! 特別活動編 目指す姿へ挑戦し続ける学級活動: 振り返り, 目標設定を通して」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 34 (1), 文溪堂, 2017, p.46-49。
- 33) 狩野薫「よりよい生活や人間関係を築く態度が育つ特別活動の指導の工夫: 自発的, 自治的な実践活動の積み重ねと振り返りの充実」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 34 (11), 文溪堂, 2018, p.31-33。
- 34) 稲垣伸孝「高学年 願いや思いを実現する実践とその振り返り: 成長を実感できる手だて」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 35 (11), 文溪堂, 2019, p.36-39。
- 35) 八田安史「学校行事 自己有用感を高めるゴールとなる児童の姿を描く: ゴールに向けて取組を修正する『振り返り』の活用」『道徳と特別活動: 心をはぐくむ』, 36 (9), 文溪堂, 2019, p.26-29。

- 36) 星野哲朗「ポートフォリオ 意思決定, 振り返り, 次につなげるためのポートフォリオ:『キャリア・パスポート』の導入に向けて」『道徳と特別活動:心をはぐくむ』, 36 (7), 文溪堂, 2019, p.18-21。
- 37) 山本泰寛「ポートフォリオ 特別活動と教科をつなぐポートフォリオ:よりよい振り返りのための基礎資料の充実」『道徳と特別活動:心をはぐくむ』, 36 (7), 文溪堂, 2019, p.26-29。
- 38) 詫磨秀雄「総括で学ぶ 人間形成のドラマ」全国高校生活指導研究協議会『高校生活指導』, 178号, 青木書店, 2008, p.6-9。
- 39) 桑原麻里「文化祭から自分史へ 作文が見つけないクラス」全国高校生活指導研究協議会『高校生活指導』, 178号, 青木書店, p.20-27。
- 40) 藤田隆介「祭り, その後に」全国高校生活指導研究協議会『高校生活指導』, 178号, 青木書店, 2008, p.28-35。
- 41) 西條正人「振り返り活動を通して生徒の自尊感情の高揚を目指す特別活動の取組:『自己受容』『ふれあい・承認』の視点を導入した実践から」『教育実践研究』, 23, 2013, p.235-240。
- 42) 小林昭文「深い気づきを生む質問による振り返り」『月刊学校教育相談』, 28 (12), ほんの森出版, 2014, p.20-23。
- 43) 阿部敬信・神田文聡・新城浩仁「小学校の教育課程における特別活動の意義と課題:学級活動『望ましい人間関係の形成』に係る実践研究から」『別府大学短期大学部紀要』, 34, 2015, p.21-30。
- 44) 市河大・今田晃一「学校行事における振り返りムービーの可能性:一学級・学年の連帯感を高めるために」『文教大学教育研究所, 教育研究所紀要』, 2015, p.107-114。
- 45) 川本和孝「小学校学級活動における TAP の活用—Z 市立 H 小学校 2 年生の学級会を事例として—」『玉川大学 TAP センター年報』, 1, 2016, p.77-85。
- 46) 玉木, 前掲書, p.79-64。
- 47) 八川慎一・岡田大爾「全校宿泊体験活動を通して生徒の意欲と実践力を高める指導の工夫—生徒指導の三機能を生かした取組みを通して—」『広島国際大学教職教室, 教育論叢』, (9), 2017, p.155-167。
- 48) 上森, 前掲書, p.93-102。
- 49) 藤崎雅子「ホームルームで『キャリア・パスポート』を活用 学んだことを定期的に振り返り自ら将来を見通すことのできる力を育成:宿毛(すくも)高校・春野高校(高知・県立)」『キャリアガイドナス』, 51 (3), 2019, p.30-33。
- 50) 木下将志・赤坂真二「クラス会議による協同問題解決過程における児童の発話に関する事例研究:振り返り用紙による児童の自己評価の比較を通して」『臨床教科教育学会誌』, 19 (2), 2020, p.11-22。
- 51) 平井陽伸・西山久子「ピア・サポート (PS) プログラムを取り入れた第 5 学年学級集団づくりの研究—PS グループスーパービジョンでの振り返りを活かした目標設定の展開を通して—」『福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報』, 10, 2020, p.87-93。
- 52) 本宮佑二郎「特別活動 学級目標を生かした問題解決集団の育成:振り返りのレーダーチャート化とクラス会議をとおして」『教育実践研究』, 30, 2020, p.181-186。
- 53) 桑原, 前掲書, p.20-27。藤田, 前掲書, p.28-35。
- 54) 玉木, 前掲書, p.50-51。
- 55) 令和 2 年 10 月 1 日「高等学校等への進学率[推移]」『高等学校教育の現状について』によれば, 高校等進学率は令和元年に 98.8%を記録している (11 月 25 日確認)。  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/20201027-mxt\\_kouhou02-1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/20201027-mxt_kouhou02-1.pdf)
- 56) 日本特別活動学会研究開発委員会『特別活動の改善に関する調査報告書—調査結果に基づく提言—』, 本特別活動学会, 2014, p. 22-24。  
なお回答は「かなりそう思う」、「ややそう思う」、「そう思わない」、「まったくそう思わない」の 4 択で実施。①, ②の数字は筆者が任意で追加した。
- 57) 文部科学省, 前掲書, p.86-87。
- 58) 詫磨, 前掲書, p.6。
- 59) 例えば, 小林昭文は学習における振り返りを扱っている。小林, 前掲書, p.20-23。
- 60) 藤井啓之, 「学校の文化活動を捉え直す」『生活指導』, 699号, 全国生活指導研究協議会, 明治図書, 2012, p.92。
- 61) 学力階層は愛知県高校偏差一覧や岐阜県高校偏差値一覧を参考にして偏差値 56 以上を上位層, 55 ~ 46 を中位層, 45 以下を下位層と設定した (11 月 25 日確認)。  
愛知県  
<https://www.minkou.jp/hischool/ranking/deviation/pref=aichi/>  
岐阜県  
<https://www.minkou.jp/hischool/ranking/>

deviation/pref=gifu/

- 62) 翻って、職務の多忙さから、5分ほどで質問項目にだけ答えてくれた後に生徒指導へと出かけた教員も何人か存在している。
- 63) 玉木, 前掲書, p.62。
- 64) G. ビースタ著, 藤井啓之・玉木博章訳, 『よい教育とはなにか—倫理・政治・民主主義』, 白澤社, 2016, p.57-58。
- 65) 愛知県における私立高校関係者内での私学フェスティバルの通称。高校の公私格差を減らすために私学助成金運動を目的としている。毎年春と秋に県内の私立高校で順番にイベントが開かれる。
- 66) 学校名の特定を避けるため、本稿と関連が薄いと思われる学校方針は記載しない。
- 67) この問いに関連して、学校方針ではないが、表1の⑧に勤務する30代男性教諭が、2013年10月25日金曜日17時半から実施した聞き取り調査において「うちみたいな（学力レベルの低い）学校はやらなきゃだめでしょ。」と述べていたことを参考に記載しておく。この教員は任意で振り返り活動を行っていたため表2の④に分類される。この内容に関しては次稿で分析を試みたい。